追跡 2大虐待事件 Part2

「ブキミと感じる」「ゾンビ」ほかの記述。実母を貶めるビラも！

里子虐待死 元リカちゃん声優 鈴池静容疑者(43)

ブログに綴っていた仮面の下の本性

享年3

「明るくてよく笑う」「あんなにいい人はいない」「教育熱心」……周囲の評判と犯行の残忍さには驚くほどのギャップがある。PTA会長を務め、会社を経営し、早稲田大学大学院で勉強するかたわら、実子2人と里子の育児に取り組んでいたスーパーマザー。だが、その「善人の仮面」の下には別の顔があった。

《ここ数日、里子の目が左右に離れたり…白目をむいて追いかけてきたり…というゾンビ現象が続いていて、どうしたものかと思っていた》《親でさえブキミと感じるほどの驚くべき顔》

ボランティア活動に熱心で、里子を預かり育てる母。だが、自らのブログのなかで、彼女は"仮面の下"の顔をのぞかせていた――

杉並区で里子の女児、渡辺みゆきちゃん（享年3）が死亡した事件。8月20日に警視庁に傷害致死容疑で逮捕されたのは、里親の鈴池静容疑者（43才）だった。

2人の実子を育てながら、「社会貢献のために」と里子を預かった鈴池容疑者。仕事でも学業でも多彩な活躍を見せていた彼女が、なぜ逮捕されたのか。

事件を追っていくと、鈴池容疑者が抱えていた危うい感情と、里親制度の問題点が浮かび上がってくる。

ゾンビの原因は・・・

2009.10.02 Friday

ここ数日、里子の目が左右に離れたり・・・白目をむいて追いかけて来たり・・・というゾンビ現象が続いていて、どうしたものかと思っていたのだが、「寝る場所を変えればいい」というアドバイスに従ったら・・・不思議なことにゾンビになくなった。親でさえブキミと感じるほどの驚くべき顔で保育園や学校に行ったら絶対いじめられると思い、正直本音は困っていたのだが、昨日今日とまったく、ゾンビにならなくなった。不思議。でもよかった。とりあえず、ゾンビから脱出！

心と体の共有

2010.07.09 Friday

[illegible]

長男が亡くなった後も、逮捕されるまで「面倒を見ていた」などと語っていた雄造容疑者。

印象について「地味で、あまり目立たなかった子」と口を揃える。

里美容疑者が育った家庭環境は複雑だった。容疑者の実家と家族ぐるみのつきあいをしていたという近隣住民のAさんが明かす。

「お父さんは板前さんで帰りが遅く、お母さんは里美ちゃんが小学校に上がったころ、がんにかかってしまったんです。闘病中は、長女の里美ちゃんが妹と弟の面倒を見ながら病院へ通うお母さんにも付き添っていました。お買い物や炊事などはすべて里美ちゃんがやっているような状態でした」

このころ、一家の家計は火の車だったという。

「治療費に加えて、闘病生活のなかでお母さんが宗教にのめりこんでしまい、多額の借金を抱えていたようです」（Aさん）

里美容疑者が小学3年生のとき、母親は35才の若さで他界。3人の子供たちは山形にある母親の実家に預けられることになった。その3年後、きょうだいは再び柏市内の自宅に戻ったが、そこには父が再婚相手として迎えた継母がいた。

父の再婚後も苦しい家計状況は続き、里美容疑者は高校時代、アルバイトをして学費を稼いだ。卒業と同時に家を出てひとり暮らしを始めたが、以後、家族とはほとんど連絡を取らない状態だったという。

里美容疑者が家を出て1～2年後、今度は継母が病気で急死。葬儀に参列したAさんは、そのときに見かけた里美容疑者の約変ぶりに驚いたという。

「かなりやつれていて、手が相当荒れていました。少し言葉を交わすと、どうも男の人と暮らしていて、生活が楽ではないようでした。住所を聞いて化粧品とか洋服とかをいくつか送ったんですが、里美ちゃんからは何の連絡もなかったです」（Aさん）

お腹の中から始まっていた次女、長男へのネグレクト

里美容疑者が一緒に暮らしていた男の人、それが12才年上の雄造容疑者だったという。雄造容疑者は布団メーカーの営業職として働いていたが、知人の評判はあまり芳しいものではない。

「とにかく短気。自宅マンションの1階コンビニの駐車場をわがものの顔で毎日使って、誰かが後の後ろに車を止めようものなら、"このヤロー、どけ！"とか"へたくそ！"とか大声で怒鳴り散らすんです」（近所の住民）

そんな雄造容疑者との結婚に、里美容疑者の家族は猛反対した。

「お父さんは"まともじゃない、挨拶すらできない男だ"と、かんかんに怒っていました。妹さんも弟さんも猛反対していました」（Aさん）

それでもふたりは'04年ごろに結婚。里美容疑者はまもなく長女を出産した。しかし、待っていたのは働かぬ夫との厳しい生活だった。

「雄造容疑者は3年ほど前から完全に無職の状態。里美容疑者が、都内の寿司店やバーでアルバイトをして生計を立てていたのですが、それでも足りず、数百万円の借金を抱えていました」（捜査関係者）

「頼るべき実家の父も借金がかさみ、'06年に自宅を差し押さえられていた。

心の歪みと苦しい家計のしわ寄せが、長女を除くふたりの子供へと向かったのか。長女はきちんと妊婦検診を受けて出産したが、次女は、通常は妊娠期間中に14回受ける検診を1回も受診せずに出産している。

妊婦検診を受けずに出産した場合、死産率は2倍、体重2500g未満の低体重児が生まれる割合は3倍以上になるといわれている。

同じように飛び込み出産で'07年に産んだ三女は、生後わずか3か月で病死。餓死した蒼志ちゃんについても、臨月にはいって2回受診しただけで、飛び込み出産に近い状態だった。

地元・柏市の自治体関係者は、里美容疑者の子育てに早くから不安を抱いていた。

「（蒼志ちゃんが）約2100gと小さく生まれたことと、これまで"飛び込み出産"を繰り返していたという経緯から、生まれた翌日に、市の児童育成課と保健所の職員が病院でご家族にお会いしています」（柏市役所こども部）

しかし、市の職員が蒼志ちゃんの1才半検診を受診させるために自宅を訪問したときには、雄造容疑者に強く面会を拒否され、最後となる4回目の自宅訪問を行ったのは、昨年9月のことだった。

「お父さんが出てきて、"自分たちはきちんと子育てをやっている"と一方的に話をされました。再三面会をお願いすると、"来年の6月なら花粉症がおさまるから、妻子に会わせる"と約束してもらいました」（同）

しかしドアの向こうでは、決して他人には見せられないネグレクトが行われていた。

逮捕後、里美容疑者は、取り調べのなかでこう述べている。

「やせ細っている姿を見られて、何かいわれるのが嫌だった」

その一方で、ごく普通に成長していた長女だけを偏愛し、連れ歩いていたという里美容疑者。

東海学院大学人間関係学部心理学科教授の長谷川一博さんはこう説明する。

「この事件の場合、母親は自分が幼いころに3人きょうだいの長女として苦労した経験から、同じ境遇の長女に自身を投影したのではないでしょうか。心に余裕がないなかで、過剰に長女の面倒を見ようとするあまり、次女や長男には愛情が向かなかったのだと推察されます」

幼少期からの心の軋みが、非業の結末につながってしまったのか――あまりにも悲惨な事件を引き起こした負の連鎖。残された子供たちに続かないことを祈ってやまない。

事件現場には、容疑者夫婦と長女が出かける際に使っていたワンボックスカーが放置されていた。

＊

みゆきちゃんが死亡したのは1年前の8月24日。3階建ての鈴池容疑者の自宅地下1階で、鉄製のらせん階段下に倒れているのが発見された。

「地階には家族の寝室があり、第一発見者は、早朝に起きて犬の散歩に出かけようとした鈴池容疑者の次女（13才）でした。救急車が駆けつけてきたとき、鈴池容疑者はみゆきちゃんに心臓マッサージをしていたそうです。**当初は階段からの転落死と見られていましたが、司法解剖すると虐待のあとと見られるアザがあった。死因は脳ヘルニアで、頭にはたんなる転落であればできるはずのない、殴られたようなあとがあったといいます**」（全国紙記者）

本誌は昨年9月にみゆきちゃんの不自然な死に注目し、虐待の可能性を報じたが、それから1年後にようやく事実が解明され、今回の逮捕につながったのだ。

黒いバーカ姿で捜査員に連行された鈴池容疑者（8月20日朝）。

「暴行したのは亡くなる前日の夕食後とみられます。みゆきちゃんの毛髪が大量に抜けており、髪の毛を引っ張るなどして暴行したようです」（同）

しかし現在のところ、本人は容疑を否認しているという。

鈴池容疑者は夫（42才）、長女（16才）、次女の4人家族。さらに里子としてみゆきちゃんを預かっていた。

本業は声優。「遊魚静」の芸名で活躍し、過去に着せ替え人形「リカちゃん」声優コンテストで準優勝しているほか、テレビCMのナレーションなどを担当。自ら劇団を主宰して演劇活動を行うかたわら、人材派遣会社を経営するなど多彩な顔をもつ。

周囲から聞こえてくる鈴池容疑者の評判は、まさに〝スーパーマザー〟そのものだった。

「家の前を里子の子と一緒によく歩いていたんだよね。**「この子、誰？」と聞いたら、「うんちょっと、里子として預かっているの」とニコッと笑って、鈴池さんがその子に対して、「面白い顔して見せてあげたら」っていうと、その子が変顔して見せてくれてね。**仲よさそうで、他人の子も育てるなんて偉い人だなあと思っていました」（50代男性）

「忙しいのに、下の娘さんが通っていた小学校ではPTA会長まで務めていました。教育熱心で、明るくて、人の悪口なんかいわない人。信じられません」（40代女性）

一方では社会活動にも従事。医療機関や老人施設などを訪れ、ボランティアで朗読などの活動も行っていた。さらに早稲田大学大学院の研究生として公共経営学を学んでいた。

「どうして里子なんて」といったPTA仲間に落胆

その鈴池容疑者が、

「子育てが一段落したので、社会に貢献したい」

そういって、東京都の里親制度への登録を申し出たのは、'07年11月のことだった。

面接などを経て2か月後に里親として登録。'08年3月、児童相談所の紹介により、乳児院にいた当時2才のみゆきちゃんと初めて顔を合わせた。

鈴池容疑者は、そのときのお泊まりなどで交流を深めた。

実際に、里親としての生活が始まったのは'09年9月16日のこと。

周囲の評判だけでいえば、彼女は〝よき里親〟だった。みゆきちゃんを遊園地に連れていったり、児童相談所が主催するクリスマス会やバーベキューパーティーで仲のよさそうな姿を見せたり。さらに、前出のPTA関係者との飲み会ではこんな口論をしたこともあったという。

「あるお母さんが〝どうして自分の子がいるのに、里子なんて預かるの？〟と聞いたら、鈴池さんが怒って、〝そんなことというのは許せない。うちにきた以上、うちの子供だから〟といい返していました」（前出・PTA関係者）

しかしその一方で、みゆきちゃんを里子としてからわずか5日後に、彼女はブログで次のような本音を明かしていた。

《里子が来て何が変わったか…という話題になり、「24時間だった1日が12時間になった」と答えた。（中略）体力的になのか、精神的になのか、起きていられないというのが本音》

不特定多数の人が見るブログに、みゆきちゃんの名前ではなくわざわざ「里子」と書き込む感覚は理解に苦しむが、1か月後には冒頭のように、みゆきちゃんを（ゾンビ）になぞらえている。

ほどなくして、大学での研究が忙しくなったのか、彼女はみゆきちゃんを保育園に預けた。

「乳児童相談所の職員が呆れたような表情でこう話す。

「虐待などの理由から、親と暮らせない子供たちを家庭的な環境のなかで養育するのが里親制度の目的。一般的には、すぐに保育園に預けることはない。理解できませんね」

昨年7月、鈴池容疑者はブログにこう記している。

《なんだか、里子と向き合っていると、いろんなものが見えなくなっていく。これが、ダークサイドなのか？》

みゆきちゃんはこの1か月後、〝母代わり〟であったはずの鈴池容疑者の自宅で亡くなった。

いったい彼女はなぜ、里親となったのか。

事件現場となった地上3階、地下1階の豪邸。

1億円豪邸、ブランド好き 胸を張り、あごを上げて闊歩

鈴池容疑者は事件の現場となった東京都杉並区で生まれ育った。

「父親は不動産関係の事業をしていたそうで、裕福な家庭だったようです」（近隣住民）

3階建ての自宅も鈴池容疑者の実家の庭の一角に新しく建てたもので、1億円はするという豪邸だ。

鈴池容疑者自身が早稲田大学の広報インタビューで明かしているところによれば、彼女は東京の短大を卒業後、銀行に就職したが、ストレスで激やせして退職。海外留学などを体験した後、婚礼司会の仕事をしたことなどから声優を志すようになったという。

声優になるためのセミナーに通う一方、大学も早稲田大学第二文学部にはいり直して卒業するなど、学業に力を入れてもいた。

しかし、それは彼女にとって「人によく見られる顔」「尊敬される自分」を増やしていく過程ではなかったか。

彼女を知る近隣住民のひとりがいう。

「たたずまいが独特なんですよね。**芸能人みたいにいつも胸を張っていて背筋がピンとしている。道を歩いているときにあごを上げ気味で、涼しい顔っていうのかしら。周りから見られることを意識しているのかなと思いました**」（40代女性）

また、別の知人はこう語った。

「とにかくブランド好き。声優という仕事を持ちながら母親業も完璧にこなし、オシャレにも気を使うという、完璧な女性を演じていたようなところがありました」

「里親」という肩書は、完璧な母としての子育てが一段落した彼女が、新たに望んだ〝ブランド〟だったのではないだろうか。

昨年8月にみゆきちゃんが亡くなったとき、彼女が近所に配ったというビラも、「自分が絶人からどう見られているか」に人一倍気を使う彼女の一面を物語っているように思える。

《メディアは世上の虐待の報道に伴い、私たちがみゆに何かしたかのように報じ、実際に取り調べられ、第一発見者となってしまった次女は、一人で警察に連行され、事情聴取されるなど心に深い傷を負わせてしまいました》

（検死後、実母の墓に引き取られることになり、茶毘にふせられることになりました。**生まれてから一度も乳児院に会いにきたこともなく、今後も育てる気のなかったお母さんに抱っこされることができて、みゆにとっては、それだけが最後に良かったことだったように思います**）

あくまで事故であることを強調したうえで、みゆきちゃんの実母を貶め、自らの虚栄心を守るために利用したとも取れる内容だ。

鈴池容疑者はビラを配っただけでなく、近隣住民や親しい人たちを自宅に招いて、みゆきちゃんの〝お別れ会〟を開いていた。みゆきちゃんが好きだったピアノの横に、遺影が飾られていたという。

＊

里親による里子への虐待事件は今回が特別なケースではない。

'02年には栃木県で3才の女児が、'06年にも千葉県で1才の男児が、里親に暴力をふるわれ、死亡している。

'09年にも大阪市で5才の女児が里親に暴行を受けて重傷を負った。

里親とは、何らかの事情で自分で子供を育てられない親に代わり、あくまで一時的に子供を預かる制度。親権は実親が持ち続けるため、里親になるための審査は、親権変更を伴う養子縁組に比べ、厳しくないといわれる。

東京都児童相談所では、'09年度にあった105件の里親希望申請のうち、102件が成立している。

今回のケースについて、杉並児童相談所の鈴木香奈子所長はこういう。

「（鈴池容疑者は）非常に熱心であり、面会や家庭訪問をする中で、里親として問題ないと判断しました。

ブログについては把握していませんでしたが、虐待の兆候はありませんでした」

このように、児童相談所は対応に問題がなかったことを強調するが、里親のもとで幼い命が失われてしまった事実は重い。

この問題を本誌とともに検証してきた医療ジャーナリストの伊藤隼也氏はこういう。

「里親のもとに預けられると、小学生くらいの子でも〝赤ちゃん返り〟してしまうことがあります。幼いころ、親と一緒にいられなかった反動から、自分で着替えをしなかったり、ご飯を食べさせてもらいたがるなど、むやみに甘える。逆に激しく反発する子もいる。それは里親が本当に自分に向き合ってくれているのかを試しているともいえます。

里親を認定する際は、こうした子供を受け止められる余裕があるかどうかを見極めたうえで、預けた後も心理カウンセラーなどを派遣するなどして、里親をケアしていく体制を整えるべきでしょう。それだけ、里親が子供と向き合うというのは大変なことなんです」

鈴池容疑者がブログに綴った心境の変化

里子のお泊り開始！
2009.08.17 Monday
朝、乳児院に迎えに行き、終日一緒に過ごした・・・。夕方、杉並児童の方が見えて、ちょっと緊張した様子も見えたが、今までの乳児院ではあり得ないほど、たくさん食べ、トイレもきちんと行き、普通にお風呂に入って・・・まったくぐずらずもう既に寝た。いろいろ、これまでの体験談やお話を聞き、覚悟を決めていたが・・・まるでヒットせず、平穏な一日が終わった。デパートにお洋服や必要物を買いに行ったことが、よほどうれしかったらしく、ずっと踊れていた・・・（笑）よかったね。また、かわいいのを買いに行こうね。おやすみ、ゆっくり素敵な夢をみてね

里親仲間
2009.09.21 Monday
（前略）
里子が来て何が変わったか・・・という話題になり、「24時間だった1日が12時間になった」と答えた。本当にそうだ。体力的になのか、精神的になのか、起きていられないというのが本音。この1カ月で、生活パターンが本当に変わったなあ。

ああ・・・もうあと二日で今月終わり（汗）
2010.03.29 Monday
今日は里子のカウンセリングがあり、朝から児相へ・・・なぜか突然赤ちゃんみたいになってしまった彼女（笑）予想以上に時間がかかり、帰るともう午後だった。
（中略）
夜は大学の研究室の人の送別会があったのだが、カウンセリングから帰ってきてお昼寝から起きると、また赤ちゃん返りしてしまい、外に出ることができなかった。育て直しが必要だとお医者様にも言われたから、当然寝付くまで施文などできず・・・じっくり向き合って寝入るのを待つ。

心と体の共有
2010.07.09 Friday
お尻が汚れていれば泣く。
お腹がすけば、赤ちゃんはなく・・・と思っていた。
でも、わたしが16年間という長いスパンで預かった里子は、明らかに心と体がつながっていない。
（中略）
なんだか、里子と向き合っていると、いろんなものが見えなくなっていく。
これが、ダークサイドなのか？

禁転載